

# キ／ャ／ン／パ／る

## 育てて、未来の科学者たち

先端科学・健康医療融合として、早稲田大内に04年設置。学内外の研究者が参加できるフレキシブルな研究システムを目標とす。文部科学省の「戦略的研究拠点育成プログラム」に私学として初めて採択された。

理数系の学力低下が懸念されているなか、中高校生を対象とした科学教室「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ研究室へ」が先月下旬、早稲田大の研究施設(東京都新宿区)で開かれた。小学生も含む23人が参加、DNAの切断実験などに取り組む真剣な姿に「彼らがいれば日本の科学に明日はある」と確信した。【明治大・野口成仁、写真も】

科学教室は、「国の補助を受けた研究の成果を披露し、中高生に科学の楽しさを知ってもらおう」という日本学術振興会のプログラムの一環。「早大先端科学・健康医療融合研究機構」の若手研究者たちが担当した(リーダー＝山口佳則・

### 早大先端科学・健康医療融合研究機構

## 小中高生に教室

同機構助教役。23人は小学6年生3人、中学生10人、高校生10人。学術振興会のホームページで知った生徒のほか、「研究機構が以前から行っている科学教室に参加したりリーダーの生徒も多い」(朝日透・同機構教授)という。まず細胞やDNAについての簡単な講義を受け、その後、数グループに分かれて実験に取り掛かった。みんな白い実験着を身につけ、緊張した表情だ。写真。



実験は、動物のDNAサンプルを特殊な酵素(制限酵素)で切り分け、電気泳動させたり、染色したりする。グループごとに違う酵素が準備され、酵素の種類によって切り分けられるDNAの長さが違う。受講者は実際に、自分たちがどんな酵

素を使ったかを推測、グループごとに発表。若手研究者たちは実験器具の扱い方を教えたり、「その薬品には気をつけて」などと注意していた。さらに、細胞同士の情報伝達から発展して、人間同士の情報伝達を助ける「ヒューマンインターフェース」にまで話は及んだ。昼食時には若手研究者たちが、自分の生い立ちや「なぜこの道に進んだか」をトーク。「研究内容が面白くて続けているうちにいつの間にか研究者になっていった」といった「研究者誕生物語」に受講者は真剣に聴き入っていた。最年少の藤田寛生さん(小6)は「知っている」と心から思った。

こともあったので面白かった。研究者になりたい。また、すでに理系分野への進学が内定している福島こよみさん(高3)は「大学ではDNAやゲノムについて研究したい。入学する前の予習として一通り実験ができた」と満足げだった。同機構が行った参加者アンケートでも(対象22人)、「実験内容が理解できたか」との質問に、「理解できた」(「どちらかといえば」含む)が18人と、参加者のレベルの高さに驚かされた。科学技術や理数科目に対する興味・関心が増加したかについても「増加した」(同)20人で、大きな成果があったようだ。最近では論文ねつ造など、科学への信頼を損なう事件を耳にする。今回の受講者たちに、実験で感じた純粋な驚きや喜びを忘れないでほしいと心から思った。